

【事例から学ぶ HTLV-1 キャリアの母親へのサポート①】

完全人工栄養を選んだ
母親へのサポート

佐賀女子短期大学
こども未来学科

柘植 薫

つげ かおる

佐賀女子短期大学

こども未来学科

〒840-8550

佐賀県佐賀市本庄町本庄

1313

「HTLV-1 母子感染予防対策マニュアル(第2版)」¹⁾では、HTLV-1 キャリアの母親が選択した栄養方法にかかわらず、全ての母親に対する細やかな支援を求めている。筆者はHTLV-1を専門とした外来を中心に活動しており、HTLV-1 キャリアや家族のカウンセリングを担当する心理師である。その活動から、HTLV-1 キャリアは各々の人生の出来事に際してHTLV-1に関連した悩みが生じる可能性があると考えている^{1,2)}。

また、完全人工栄養を選択したHTLV-1 キャリアは、母乳をあげない理由を尋ねられて返答に困ったり、HTLV-1のことを自分自身でもあまり理解できていないため、周囲にどう説明すればよいか分からなかったりしたなどの経験をするケースがある。そしてそのことから、母乳制限に伴う孤独感や、HTLV-1が一般に知られていないために生じる不安を抱えることがあり、これらもHTLV-1 キャリアの特徴とされている³⁾。本稿では、こうした不安を抱えながらも、完全人工栄養を実施したキャリアのケースを紹介する。

CASE

1

30代の経産婦、Aさん。

Aさんは第2子の出産を予定しており、現在妊娠7カ月。妊娠中の経過は順調で、HTLV-1専門外来をマスコミで知り、「出産前に一度受診したい」という動機から外来を訪れた。診察後のカウンセリングは、受診者の話を尊重して聞くスタイルで行われ、Aさんは以下のように語った。

完全人工乳を選んだ母親の体験

Aさんは、5年前、妊婦健診でHTLV-1キャリアと判明した。その際、産科医師から「HTLV-1は母乳で感染するから母乳育児は勧めません。どうしても母乳を与えたいのであれば、3カ月以内に限って与える方法があります」と言われ、驚いた*1。母乳育児は当たり前のことと思っており、HTLV-1自体も初めて聞くものだっ

*1 p.440 「HTLV-1 キャリアであったと診断された母親の心理状況」を参照

た。1人で受診していたAさんは「どうしたらよいか分からない」と少し混乱した。そこで医師から「育児はもっと大変なんだからね。そんなに悩むことはないよ」と言われ、余計に戸惑った。感染経路についても説明を受け、いつも相談できる夫にすぐ話そうと考えた。

帰宅後、夫に話すと「昔、自分が献血を受けたとき、通知があった。忘れていたよ」と言われ、Aさんは驚いた。夫から感染した可能性が高いと感じ、少し泣きそうになった。夫は申し訳なさそうな表情を浮かべながらも、「子どもには母乳を与えないほうがいいね」と主張した。自分の感染についてをあまり覚えていないのに、子どもに母乳を与えないほうがいいと言う夫の姿勢に、Aさんは少し不満を覚えた。しかし、HTLV-1キャリアであることからすでに不安を抱えていたため、将来子どもに同じ思いをさせたくないと考え、自分の感情を抑えて完全人工栄養を選ぶことを決意した。また、夫以外の人に感染について話すと、かえって余計な心配をかけるかもしれないと思い、控えることにした。

出産後、夫の母親は育児を手伝ってくれる心強い存在だった。しかし、「母乳は出ているの?」と、尋ねられるたびに「なかなか出ないんですよね……」と曖昧な返事をするのがつらかった。さらに、義母もキャリアではないかと心配し、感染のことを話すべきか迷った。しかし、産科医師が「あまり心配しなくてもよい」と言ったことや、赤ちゃん中心の生活が忙しかったため、義母にはHTLV-1について話さないことにした。

ある日、夫の従妹から、「私も(母乳が)出なかったのよ。でも、頑張ったら出るようになったから、Aさんも頑張ってみてね」と励まされた。その際、夫が「パパも抱っこしてミルクがあげられるからいいんだよねー」と話に入ってきて、雰囲気や和やかに変わったことがあった。Aさんは「お義母さんたちは、私に強く母乳育児を勧めたいわけではなかったのかもしれない。『母乳』という言葉が話題に出やすいだけかもしれない。でも、その言葉が出るたびに、どう答えたらいいのかと、いろいろと考えてしまいました」と語っていた。

その後、乳児訪問で保健師がAさん宅を訪れた。AさんがHTLV-1キャリアであることや、母乳をあげたい気持ちもあったことを伝えた際、保健師から「母乳をあげてもよかったのに。短期母乳という方法もあったんですよ」とあっさりと言われたことがあった。Aさんは、自身の葛藤を無視されたような気持ちになり、理解されないと感じた*2。この経験を受けて、HTLV-1について

*2 p.450「葛藤への共感」を参照

*3 p.448 「傾聴・共感」を参照

話し合いを避けることにした。その後の生活で特に心配な出来事はなかったが、「HTLV-1 への思いをずっと抑えて過ごしていたのかもしれない」と述べた*3。

Aさんは、一通り話し終えたところで、「振り返ってみると、いろいろな思いが出てくるものですね。話してスッキリしました。話を聞いてくれてありがとうございます。今回もミルクにしようと思って、先生や助産師さんたちにはそう話しています。でも、赤ちゃんの顔を見たら母乳をあげたくなくなっちゃうかもしれませんね。無事生まれてきてくれることが一番ですよ」と語った。

カウンセリングの途中で悲しみや怒りの表情を見せたAさんだったが、最後は笑顔を見せた。HTLV-1に関する夫や義母に対する不安は、専門外来の医師に相談し、今後の検査や受診のスケジュールを確認して帰宅した。

その人自身がHTLV-1との関わりを見つめることを支援する

HTLV-1キャリアは、普段は曖昧な不安としてHTLV-1の問題を抱えている。カウンセリングでは、話しながら自分の過去を振り返り、解決できない事柄について気持ちの整理を行う。母乳育児ができないこと、できなかったことは、悲しいことか、悔しいことか、納得のいかないことか、その人によって捉え方が異なる可能性があるが、ほとんどのキャリアにとって違和感を覚える事柄ではないかと考えられる*4。支援を行う側として関わる際に大切なことは、相手につらいことや分からないことがあるかどうかを聞くことであり、聞いた側の判断で、性急なアドバイスをしないことも重要である*5。

読者にはAさんをイメージしていただけると幸いである。完全人工栄養は、最も多くのキャリアが選択する栄養法だが、それぞれが抱える葛藤について、人生のストーリーを聞きながら、本人とHTLV-1との関係を見つめる作業を支援したいと思う。 J

【文献】

- 1) 内丸薫(研究代表者): 厚生労働科学研究班によるHTLV-1母子感染予防対策マニュアル(第2版). 厚生労働科学研究費補助金(健やか次世代育成総合研究事業) HTLV-1母子感染対策および支援体制の課題の検討と対策に関する研究. <https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/boshi-hoken16/dl/06.pdf> [2023.08.18アクセス]
- 2) 柘植薫: キャリアマザーに対する臨床心理学的アプローチ—HTLV-1がキャリアマザーに及ぼす心理的影響について. 周産期医学, 50(10): 1730-1733, 2020.
- 3) 柘植薫, 末岡榮三朗: 妊娠から子育て期にあるHTLV-1キャリアの母乳制限に伴う母親の気持ちや相談の在り方に関する一考察. 助産雑誌, 74(12): 930-935, 2020.

*4 p.447 「HTLV-1キャリアの母親の状況」を参照

*5 p.450 「アドバイスの危険性」を参照